



国労せんだい

こくろうせんだい
FAX版

号外
2011年3月29日
発責 橋本 昭二
編責 武田 昌仙

東北地方太平洋沖地震

今こそ鉄道輸送の使命を

望まれる在来線の早期復旧



編集長の眼

東日本の鉄道は太平洋側の沿線を中心に壊滅的な打撃を受けた。東北新幹線は言うに及ばず、仙台支社内では仙石線、東北本線、常磐線……。当面の復旧予定はある。だが、想像以上に在来線の復旧と運転再開の進捗が思わしくない。本社と支社の最優先課題は新幹線と聞く。当然のようだが果たしてどうか。

「こんな、職場の声がある。新幹線は何を運べるのか。救援物資？被災者？燃料？鉄道復旧の資材や材料？何も運べないじゃないか。優先順位が間違っていないか」

道は太平洋側の沿線を中心に壊滅的な打撃を受けた。東北新幹線は言うに及ばず、仙台支社内では仙石線、東北本線、常磐線……。当面の復旧予定はある。だが、想像以上に在来線の復旧と運転再開の進捗が思わしくない。本社と支社の最優先課題は新幹線と聞く。当然のようだが果たしてどうか。

「戦後の焼け野原の町に、鉄道が復興に役立った。嬉しい思いの地域にヤミ米を運んだのも鉄道だ。時代は確かに違うが、こんな時こそ鉄道の役割は大きい。こころした意見に会社もしっかりと耳を傾けるべきでないか」と言われた。私は頷くより他なかった。

ガソリン不足が深刻な状況の中、生活と通勤・通学の「足」としてまさにその役割が求められていると実感している。モーターゼーションが高度に発達し、万能かと思われた今日、今回の地震と原発事故はその脆さを露呈した。

壊滅的な姿に言葉失う

全国の仲間から本部に集約された支援物資が3月26日、本部経由で仙台、郡山、小牛田、福島地区に届いた。仙台地区では3月26日、地本中島副委員長、岩井執行委員、千葉宮城県支部執行委員が、物資を石巻地区の仲間へ届けた。組合員は、仲間の温かい支援と激励に大変喜んでいたと報告がされた。

翌日の27日は地本橋本委員長と武田執行委員が石巻に。OBの蘇武さんのガイドでまず仙石線駅連合の松川さん宅を訪問。松川さんは震災後約一週間、安否の確認がとれておらず、心配されていたが、自宅近くの配給に並んで帰ってきたところでお会いすることが出来た。水道、電気、ガスがまだ復旧はしていないが、元気な顔を拝見し一同安心した。

在来線を早期に復活させ、地域生活を復興に導くことを第一に考えること。それこそが、今後の鉄道の評価と発展に直結すると考える。

次に石巻駅を訪れ石巻駅連合分会のAさんと面会。自宅を津波の直撃で失い、職場に避難していた。残念ながらも奥様と愛娘、義母様の3名の行方が未だ不明であり、気丈に振る舞うAさんであったが、反対に事の重大さが再度認識され我々は言葉が続かなかった。

途中、石巻湾が見渡せる日和山公園に立ち寄り絶句した。病院と大きな寺院の他は殆ど跡形もない。

何った。数日前、やつと津波の水が引いたので、ヘドロにまみれた一階の清掃を息子さんと行っていた最中であつた。ライフラインは見込みなし、一階の家電製品は全滅、車も塩水に浸かっていたため廃車になる。

会話の最中、娘さん達も駆けつけ総出で清掃と逆に一から出直しという気持ち。家族も無事だしコツコツやります。ご支援本当にありがとうございます。という明るい笑顔に我々は少しだけ救われた気持ちになった。



至る所で見られる風景。傷は深い



戦場より酷い石巻湾。人も建物も海にのみ込まれた